

氏名	林 浩美
ヨミガナ	ハヤシ ヒロミ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第649号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 痛みに沈黙する絵画－抑圧と可視化するペルソナ 〈作品〉 マゴット 亡骸 死灰また燃ゆ 抜け殻 小作品集・日常絵画 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	齋藤 芽生
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	秋本 貴透
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	薄久保 香
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	杉戸 洋
（副査）	東北生活文化大学	学長	（）	佐藤 一郎
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、「語らないこと」「沈黙すること」で生まれる私の絵画表現の在り方を自身の個人史を通して振り返るとともに、肖像画に描かれた表情の意味をあらゆる時代の作品を参考にしながら紐解いていくものである。私自身が2011年3月の東日本大震災で福島第一原発事故の被災者となったことは、私が肖像画を描く際の表情に「語らないこと」をもたらした。心の痛みは言葉や表情に表さなければ、他人には目視できないということ、そして同時に他人が同じ痛みを抱えているかもしれないという考えに至った。また、震災直後に感じた社会的抑圧は私の作品に多大な影響を与えた。当時のメディアなどが、極度に笑うことや悲しむことに対して自ら制限をかけたことは、目には見えない社会的抑圧であると私は考える。震災や戦争で多くの人の命が奪われた直後は笑顔が許されない様に、社会的抑圧は個人的な範囲でも日常的な問題として起こりうる。痛みを感じていても沈黙する態度は、その置かれた状況や自分自身によって作られたペルソナが可視化している状態であると私は考えた。本論文は、肖像の不可視化された精神と可視化している表情について考察し、社会や日常生活を激動させる悲しみや怒りに無表情で抵抗する人物像を、寓意という現実のフォルムを借りて絵画化した試みを言語化していくものである。

第1章「仮面」では、私にとっての仮面が感情を抑圧する性質を持つことについて言及する。ここで示す仮面とはペルソナに分類され、人間が社会に対して被る表情のことを指す。そして私の絵画におけるペルソナとの出会い、自身の作品における無表情を語る。また物質的な仮面の性質として感情を象徴することが可能な点について考察する。私の作品は日常風景を描くが、その中には寓意となった傷や痛みがさりげなく隠されている。この章の最後には、日常の中に異質なものを潜ませることで不気味なものを演出する作品について語る。

第2章「無表情×寓意 台詞としての寓意」では、人物像とその感情を表す寓意的なモチーフについて語る。私の作品では寓意のモチーフが台詞の役割を果たし、傷や痛みを代弁している。たとえ肖像が無表情の直立不動でも画面は物語を話すことができる。

かつて各地的に発生したヴィーナスやコレー像、または仏像が示す通り表情を作る際に最初に出現するのは微笑だという。そこで全ての表情を分類し、人間的な表情、微笑像（アルカイックスマイル）、無表情に分けて作品例を挙げながら考察する。特に現代における無表情絵画は社会との対峙や社会的背景の追求によって無表情となることについて語る。

第3章「沈黙をグレーで表現する」では、絵画における背景が作品に何をもたらすのか背景がグレーの自身の作品をもとに解説する。そこで、背景とモチーフの関係において全面光と側面光の絵画に分類して語る。絵画の背景において側面光がもたらす影響とは、そのモチーフが存在した時間や空間を描写することだと私は考える。また私の作品が背景に何も描かないのは、何もない空白地帯はびんと凜いだ海面のように「畏怖」を感じさせる。それはまだ何も起こっていないがこれから起こるかもしれないという想像力をもたらし、日常を描いた絵画に不気味さを演出する。

第4章「痛みの表現—現代社会と抑圧—」では現代社会における見えない痛みや抑圧、絵画における傷や痛みの表現を探る。心の傷とは相反して、目に見える傷の絵画はキリスト教の生々しい磔刑図や日本の九相図、地獄絵図、または藤田嗣治の戦争画などを例に挙げる。また自傷絵画としてはフリーダ・カーロ、石田徹也を例に挙げ、現代社会において隠された心の痛みの表出を、作品例を挙げて結び付けていく。その中で、心の傷を表現する絵画は一様に無表情であることに気づく。そして心の傷を絵画に表現しようとするとき、むしろ表情は邪魔なのではないかと私は考えた。この観点が、私の作品が心の痛みやトラウマに対して表情では「語らないこと」「沈黙すること」を選択することの裏付けとなった。私が表現しなければならないのは、激動の体験（トラウマ）に対峙する無表情の人物像に、感情を表すモチーフを描き込むことで傷を可視化することであり、見えない痛みを表出せざるを得ない私の葛藤を絵画を通して描く。画家の葛藤として「表出しないもの」の在りかと使い方を認識することは大切で、その「表出しないもの」の在りかこそが人と人とが共感し合える一つの要素である。

結論として、心の傷や激動の時代を生きた絵画が無表情であることは、トラウマに対峙したとき「沈黙」し、心の傷や痛みをあえて表情や言葉にして説明しない絵画であることで、他人の表出していない感情に共感を呼ぶことができるのではないかという考えに至った。

（論文審査結果の要旨）

本論文は、沈黙、ペルソナなどをキーワードに肖像画の制作に取り組む筆者が、その制作過程を通して思考した問題をまとめたものである。

本論文は、全4章で構成されている。

まず第一章の「仮面」では、学部の卒業制作で描いた自画像を、レオンフレデリックの『夜のアレゴリー』や、レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナリザ』と比較考察することから始められ、その顔の描写における無感動や無表情が「ペルソナ」という視点から分析される。日本の能面の無表情（な表情）などにも言及されながら、顔の造形性の意味が探究される。

続く第二章の「無表情×寓意 台詞としての寓意」では、前章での問題設定を受け、表情の代わりに寓意（Allegory）で表現することの考察が展開される。林の作品には、スズメバチや蝶が、描かれた人物の顔の周りに描かれることがあるが、それらの寓意性について、クラナハの『ヴィーナスとクピド』などを取り上げながら、クピドにまわりつく蜜蜂の描写などと重ねつつ、蜂における攻撃性や痛み寓意について考察が続いていく。さらに絵画に描かれた表情についての考察も展開される。

第三章「沈黙をグレーで表現する」において、筆者の論点は一転し、それまでの、絵画における寓意や意味などいわば文学的ともいえるアプローチから、グレーという「色彩」へと論考の焦点が移り、まさに

絵画ならではの考察が展開される。そのような色彩に加え、光の表現における前面光や側面光についても論じられる。

最後の第四章「痛みの表現 ―現代社会と抑圧―」においては、これまでの第一章・第二章の起承転結の「起承」、そして第三章の「転」を受けて、まさに結論としての「結」の内容で、これまでの論考がまとめられ着地点をみせる。それは「痛みに沈黙する絵画」という筆者の論考のまとめであると同時に、筆者の絵画制作における一つの到達とも重なる。そのようにして、筆者の絵画世界が鮮やかに言語化されることに成功した。

このように、本論文は筆者の絵画制作のキャリアと、さまざまな美術作品への考察が表裏一体のものとして提示され、また取り上げる絵画作品の作例も的確で、わかりやすく明快な論考になっており、その論文としての成果を高く評価できる。よって本論文を東京藝術大学・大学院美術研究科の博士論文として合格とする。

(作品審査結果の要旨)

薄暗い部屋の中で、カーテンの隙間から漏れる光は、たいそう美しい。その光に興味を持てなくなったとき、気が付かないうちに心が殻にこもっていたのである。私の作品の内でここ数年気づかない間に消えていたことは、壁の光を描こうとしなくなったことである。それはつまり、見ることの放棄である。これは申請者 林浩美の博士提出論文の第3章「沈黙をグレーで表現する」の中で語られている。

これを契機に、2019年から制作されはじめたのが、博士提出作品の一つである「日常絵画」シリーズである。作品サイズは多種だが全て小品で、百合の花、柘榴、ガラスの花瓶、自身や老人の手などが18点展示されたものであるが、それまでの絵画作品との違いが見て取れる。修士課程以降の多くの絵画は、単調なスフマート技法のような輪郭がぼんやりとした、色彩のグレー色もくすんでいるので、どこか不安を漂よさせていた。これは、博士提出論文でまとめられている「痛みに沈黙する絵画」に繋がる表現世界にも思えるのだが、同時に絵画として自立する上で絵画構造や油絵具の不安定さとも言えるものであった。画面だけを見て制作することで起きる迷いや葛藤の繰り返しの中で、画面の外に目を向けた時に日常の光の存在を思い出した。油絵具が発明される前のテンペラ絵画の時代は、色が物質として存在していた。その後、油絵具の特性である透明性を持つことによって、色が光に変わることが発生した。色が物質から光に移り変わることは、物質がイメージに転換するとも言える。現実世界を見ることに立ち帰った時、それは油絵具の透明性、不透明性を使い分け、重層的な構造を成すことになり、特に絵画の特徴の一つであり、沈黙の色として長い間こだわり続けているグレー色が明確な意思を持って主張するようになった。これは別の提出作品「死灰また燃ゆ」、「マゴット」、「抜け殻」、「亡骸」にも通じるもので、日常の光が油絵具のオプティカルグレーとして「日常絵画」シリーズより良く表れ、それは「光の絵画」とも言えるものになった。

この変化は、制作以上に博士論文の執筆が影響していると思う。申請者は、大変な苦勞をして自らを掘り下げ、言葉を紡ぎ出していく中で、沈黙することの意味から、沈黙することによって見えてくるもの、沈黙することではか語りえないもの、沈黙することによって見なければいけないことが、言語化することによって、制作に対する姿勢や絵画の視点にも刺激を与え、相乗効果が生まれたと言える。申請者は、この世界に存在しながら、この世界に属さないともいふべき姿勢で、この世界に距離を取って制作していたように思う。今回の博士提出作品で、この世界に存在し、この世界での存在のあり方を発見した作品になったのではないかと。愚直に世界を視、制作を続けていくことを期待している。

博士提出作品は、主査、作品副査から博士学位として認められる作品として高い評価を受けた。

(総合審査結果の要旨)

提出作品《亡骸》、《マゴット》では、何かをじっと耐える表情の女性とともに、その体を糧に育つ蠅の群れが描かれる。実は悲しみを口にせず耐える自身のありようが踏まえられており、また大災害の犠牲となった動物の死骸に群がる虫とも重ね合わせられている。画面を満たす柔らかな中間色はよく吟味されているが、このグレーに対するこだわりさえも、「無表情の仮面」を言い表すための工夫だという

《日常絵画》に描かれるような果物や魚の静物、カーディガンを着た髪の毛の長い女性モデルなど林浩美がよく選ぶモチーフは一見すると、多くの具象画家が好む保守的とも言える世界観のうちに留まっているように見える。しかし細部を凝視するとき見えてくるのは、人物の体に群がる蠅や蜂、肌を傷つける蕁麻疹(いらくさ)の首飾りやナイフなど、攻撃性を秘めた寓意である。それに気づくと、穏やかに描かれていると見えたモデルの顔の無表情さが逆に気になり、平穩無事に見えたかのようなグレーの空間も、急に張り詰めた葛藤の場に見えてくるのだ。《死灰また燃ゆ》のように率直に見える作品でさえ単なる静物画ではなく、題を見て初めて何らかの激情が秘められていることがわかる。

論文は、絵画史に登場した様々な仮面、寓意を表すモチーフ、無表情的人物像などが効果的に例解されつつ、それと比べながら自身の作品のこれまでの流れを自然に紹介している。本人が今まで自己発露できずにいた複雑な心情の綾を全て吐き出すかのような切々とした誠実な文体は、説得力のあるものだ。《痛みで沈黙する絵画》とは、あえて「沈黙」を選ぶことで他者の傷に寄り添うということなのだ。2011年、福島の実家に居た林は東日本大震災に遭った。それに連なる原発事故により彼女の家族は、我が家を置き去り故郷から離れざるを得ない状況になった。着の身着のままのようにして避難したのち一時帰宅した時に見た、死んだ愛猫の姿、荒れ果てた家の姿は、林の心に筆舌に尽くしがたい痛みと影を遺した。しかしその体験の傷に自分自身「沈黙」するしかなかった時間の内省が、本論文のテーマそのものになった。

林はもともと自身の物静かな性質に対して、思い悩むところがあったようだ。表出し得ない激情と平穩な態度の間で「中間的な表情の微笑」を作り続ける自身に対して、自己批判的な眼を持っていた。彼女はそれをペルソナ(仮面)という心理学用語で表し、絵のなかで自己言及的に、解釈不能なほどの曖昧な微笑や無表情を装った感情を表現してきた。実際の彼女と接すると、彼女が最も感情の襞を表出している場所が絵画の中にしかないであろうことは、容易に想像できる。そのような内なる心理の蠢き、痛みを秘めた静かな表現力を孤独のなかで磨いてきたこと、震災によって喪失と痛みを見つめ直した経験が、最近の彼女の絵画世界の説得力に結びついている。

「傷ついた時に明るい歌を聞くと悲しくなる」という本音を同じように持つ、どこかの繊細な他者の心情に染み入る表現をしてゆくという決意が論文の最後に示される。

作品・論文ともに、作者自身を振り返る深い内省的な取り組みとして、高く評価された。